

全国公の思い出

1994年 名古屋大学卒 岩佐秀樹

全中2位という肩書を引っ提げ、鳴り物入りで名大に入学した私は、入学当初より他大学からも注目される存在であった。全盛期は中学時代であったとはいえ、高校時代もその貯金で徳島県の代表にはなっていたので、全国公でも活躍できるだろうと高を括っていた。

ところがいざ試合に参加してみると、レベルの高さに驚いた。岡山大の廣瀬さん、筑波大の梅原さんや平野さんなど逆立ちしても勝てそうにない選手がたくさんいて、3年まではほとんど目立った活躍はできなかった。七大戦では団体戦とダブルスで4連覇、シングルスで2年と4年の2回、計10回優勝したのと比べると寂しい限りの戦績だ。

全国公でそれなりの実績を残せたのは4年になってからだった。4年竹田、岩佐、3年村瀬、石井、2年千種という分厚い布陣で臨んだ団体戦では決勝で大瀧率いる新潟大と激突した。1-2で迎えた4番で石井がセットオール20-14とリードし、ラストは名大有利の組み合わせだったため優勝をほぼ手中に収めたものの、石井はマッチポイントを握った途端、何故か後陣からロビングを上げ始め、あえなく逆転負けを喫してしまった。

竹田と組んだダブルスでは、準決勝の筑波大ペアとの接戦に勝利し、勢いそのままに決勝で東大の齋藤・木津ペアをストレートで破って、念願の全国公初タイトルを獲得した。

シングルスでは、名大の団体戦メンバーがベスト8のうち5人を占めた。私は絶好調で、横国大の座喜味との激戦を制し、その後も勝ち上がって決勝へと駒を進めた。相手は新潟大の大瀧。大瀧の硬軟織り交ぜた巧みな戦術を切り崩すことができず、準優勝に終わった。

以上が全国公の大会での思い出だが、国公立関係で忘れられないのは沼津で開催された国公立合宿（現在は「卓球研修会」）だ。練習後の懇親会が壮絶で、合宿所のビールを飲み尽くした我々は、安物のウイスキーを買い込んで一気に飲みを繰り返し、全員が酔い潰れた。夜中に大きな唸り声が聞こえ、何かと思って起きると、東大の齋藤が寝ながら火山のように吐瀉物を嘔き上げていた。最終日のトーナメントでは、多くの学生が二日酔いで試合にならない中、前日ビール瓶を持って追いかけてくる阪大の齋藤さんから逃げ切った私は決勝まで残った。相手は筑波大の片野坂さんで、攻撃選手相手には滅法強いがカット打ちが大の苦手なのを知っていたので、当時は攻撃中心だったもののオールカットで対戦し、優勝した。

1991年には千葉の幕張で開催された世界卓球選手権を観たいと、卓球部の仲間数名と青春18きっぷで上京した。入場料が思いのほか高く、逡巡しながら会場周辺をうろうろしていると、係員のアルバイトをしていた筑波大の方がタダで入れてくれた。この時に卓球史に残る伝説の一戦、統一コリア対中国の決勝を会場で直に観戦することができたのは一生の思い出である。

大学卒業後は住友商事に就職し、3回の北京駐在を経て、昨年よりシンガポールで4回目の駐在をしている。娘が来年からブリスベンの大学に進学することになり、定年後はブリスベンで自由気ままな生活を送ることを夢見ている。